

＜書 評＞

三宅 貴夫 編（京都・堀川病院）

老人呆けの理解と援助

奥山 則子（水元保健相談所）

老人看護を考える時「寝たきり」と「呆け」の問題は避けて通ることはできない。

寝たきり老人については、看護法や福祉制度が不十分なながらも整いつつある。また、寝たきりを予防するためのリハビリテーションの知識もずいぶん普及してきている。

ところが、呆け老人については、個々の老人や生活環境により、状況が複雑で多様であるのとあわせて、精神障害に対する偏見のため、家族の中にまだまだ問題が隠蔽されているのが現実である。保健所へ持ちこまれる相談も、家族の中で苦慮しながらなんとか対応し、それが限界となった時点での病院や施設への紹介を求めるものがほとんどである。

呆け老人のケアに、体系だったものが不在の現状のなかで、本書は、看護婦、保健婦、寮母、医師、ボランティア、そして家族が、呆け老人と直に接して、悩み、苦しみながら、よりよいケアを模索しているその実態がまとめあげられている。

第Ⅰ章は、老人呆けの理論で、呆

けの定義や症状が述べられている。

「老人呆け」とは、「一度獲得した知的機能（記憶・認識・推理・判断学習など）の低下により、自己や周囲の状況把握・判断が不正確になり、適切な対応がとれなくなり、自立した生活が困難になっている状態」と定義されている。ここでの老人呆けは、あくまでも状態であり、脳の器質的変化の有無は問われていない。第Ⅱ章では、呆け老人の現況として、全国で約50万人と推計される呆け老人の出現率や、「呆け老人をかかえる家族の会」のアンケート調査に基づいた介護実態が記されている。第Ⅲ章では、個別的援助、家族および家族の連帯による援助、統合的援助について具体的に述べられている。中でも、「呆け老人をかかえる家族の会」の成立過程と、その後の発展状況について詳しく書かれているので、家族のかかえている問題がよくわかる。また、生活用品・病院での運動プログラムをイラストを使って紹介しているのはわかりやすい。第Ⅳ章は、7事例を通して援

助について述べているが、前章でも事例を通して語られている部分が多く、それらをあわせ読むうちに、呆け老人の理解と援助の個性・共通性がおのずと見えてくる。

本書は、序章の中で題名の「呆け」という言葉について「『呆け』という言葉は軽べつの意味をこめて使われることが多かった。——呆けという言葉には、たとえば『寝ぼける』のぼけのように、一時的にぼんやりした状態をさす意味もあって、安堵感を与える。近親者にとっては、老人の過去の健常な姿が今なおどこかにかくされて、一時的にぼんやりしているのだと思いたい気持ちもあろう。それがたてはかない願いであったとしても——そのような意味もこめて呆けという言葉を使用したい。」と述べられているように全体を通して、どの著者の文章からも老人に対する人間的暖かみが随所に感じられる。

この本を定礎とし、さらなる現場からの積み重ねによって、呆け老人と家族への中身のある生活援助の体制が生み出されることを願っている。そんな意味からも実践の場で働く多くの人々に読むことをすすめた本である。

（A 5，頁252，1982，¥2,500，医学書院刊）